

真理とは何か



大学総合文化政策学部教授
総合文化政策学部長
SHIGERU Makino
茂牧人

二〇一九年九月九日十日に青山学院大学において、「キリスト教における真理論」という 주제로、日本基督教学会第六七回学術大会が開催された。そのシンポジウムにおいて、筆者が、専務理事として提題を行ったので、それを基に「真理とは何か」と題してお話ししたい。

本学の教育方針の中に、「真理を謙虚に追求し」という文言がある。まさに大学の営みというものは、真理探究がその中心である。現代の大学での営みすべてを一つの真理概念で統合することは難しいが、真理に関わらない学問はないので、その真理ということで、多様化した諸学問をゆるやかに一つに統合することができることを期待している。

アイデアという本質が、事物の存在や人間の自由と思索の根拠となっている。そこから、ハイデガーは、二つの解釈を展開する。

一つは、囚人である哲学者が、生成消滅する現実の世界である洞窟の中から、永遠のアイデアの世界である洞窟の外の世界へと引きずり出される行程と、永遠のアイデアの世界があることを告げに洞窟の中に帰り、殺されてしまう行程が、真理と自由の関係を述べているというのである。アイデア（真理）の世界へと引きずり出されるのは、「くからの自由」であり、消極的自由であるが、真理であるアイデアへと向かっていくことは、「くへの自由」であり、積極的自由である。このように、真理があるからこそ、人間の自由と思索が可能となっていることを主張する。

第二に、この洞窟の中と、外のアイデアの世界とを行き来することが、存在の真理の隠れと現れの運動となっている。洞窟の中にいる、隠れている段階から、外のアイデア（真理）の世界に移る段階、すなわち現れ（隠れなき）の段階へと至り、また戻ってくるのである。その真理の隠れと現れの運動が、事物の現れと人間の自由と思索を可能にしている。

さらに、ハイデガーは、この存在の隠れと現れの運動の背後に、深淵・脱根底（Abgrund）が潜んでいるという。この深淵から存在の隠れと現れとの運動が出現してくると述べる。この

ハイデガーの真理概念

真理概念は、聖書にもでてくる、キリスト教に刻印された概念でもある。実は、『ギリシア語 新約聖書釈義事典Ⅰ』（教文館）によると、真理を表すギリシア語のアレテアという概念は、二十世紀の哲学者であるハイデガーと神学者であるブルトマンの論証が、今なお論駁されずに有効であるという。その論証によると、アレテアというギリシア語の元々の意味は、「隠れなき」つまり「現れ」を意味しているとされる。

実は、ハイデガーは一九三〇年代に入ってから、その思索を「存在の真理（隠れなき）」として展開した。つまり、存在の隠れから現れの運動が、存在者が存在者として現れてくる根拠となっており、その存在の真理（現れ）から、人間の自由と思索が生起してくると述べるよう

ような省察は、実はシェリングの神の中に無底をみて、そこから根底と実存の運動がでてくることで、人間の自由、人間の善と悪が可能となっている思索から由来していることが分かっている。ここには、ドイツの神秘思想の深い思索が流れ込んでいるのである。

存在忘却に陥った形而上学の克服

実は、このような深淵・脱根底から存在の隠れと現れの運動が生じるからこそ、人間の実存や自由が可能となっている。また、この存在を深淵・脱根底として捉えることができるからこそ、これまでの哲学の歴史が、存在を忘却して、存在を真理の出来事として捉えることができなかつた形而上学の歴史を見抜くことができる。

例えば、これまで真理を「ものと知性との一致」としてみてきた真理概念が、存在忘却に陥った真理観であることを見抜くことができ、今後は、存在を隠れと現れの運動・出来事として、存在者の現れを可能にする根拠として捉えることができるのである。このモチーフを、ハイデガーは、「形而上学の克服」といつている。

筆者は、さらにこのような真理概念が、人間の自由と関わる時、それは逆説的に関わってくると思っっている。人間の自由には、必ず真理を拒絶する悪の問題が潜んでいるからである。人間は、悪を行ってしまう自己自身を放棄する

になる。この場合の、存在とは、事物存在者（例えば水筒という事物）のようにずっとそこにありというような存在ではなく、人間の実存している生とでも言い換えられる活きた存在である。その存在の隠れと現れの運動によって、存在者である人間の自由や思索が可能となってくる。すなわち、ここでハイデガーは、ヨハネによる福音書八章三二節の「真理があなたたちを自由にする」という言葉をもとに、真理が、人間の思索や自由の根拠であることを述べている。そのために、彼は、たびたびプラトンの「洞窟の比喩」を用いて、解釈する。

「洞窟の比喩」とは、プラトンがアイデア論を分かりやすく述べたために用いた比喩であるが、洞窟の中が現実の世界であり、洞窟の外が太陽に照らされた世界がアイデアの世界である。

ときに、真理から導かれ、活かされるのである。

真理概念の特徴と問題点

最後にこのような真理の省察には、どのような特徴と問題点があるかを取り上げておきたい。一つは、ハイデガーは、例えばものを質料・形相論から捉えるとき、それがキリスト教の創造論にまで影響を及ぼし、創造が神の制作となつてしまい、ものをものとして、芸術作品を芸術作品としてみることができなくなつてしまったと批判した。その質料・形相論では、ものが有用性の観点でしかみられないからである。このように、真理の省察には、すべてのものに役に立つかどうかという有用性の視点でみることへの批判が含まれているであろう。

しかし第二に、このハイデガーや、シェリングの思索は、一つの深淵・脱根底として存在を捉え、あるいは、一つの無底として神を捉えるために、そこにある種の全体化が起こる危険性も含まれている。現代の世界の中で大事なことは、多様性や複数性という観点である。だからこそ以上のようなキリスト教に刻印された哲学的な省察もまた、そのような多様性や複数性と矛盾しないような、一つの真理を追求していくことが今後の課題となるだろう。

